

第66回名古屋春栄会  
演目のあらかし

令和5年7月30日

名古屋春栄会事務局

## 目 次

高砂（たかさご）	1
七騎落（しちきおち）	2
熊野（ゆや）	3
経政（つねまさ）	4
松風（まつかぜ）	5
玉ノ段（たまのだん）〔海人（あま）〕	6
花筐（はながたみ）	8
西行桜（さいぎょうざくら）	9
鼓ノ段（つづみのだん）〔箏太鼓（ろうだいこ）〕	10
吉野静（よしのしずか）	11
善知鳥（うとう）	12
玉ノ段（たまのだん）〔海人（あま）〕	13
鉄輪（かなわ）	14
鳩（ぬえ）	14
鶴亀（つるかめ）	16

### 〔能のミニ知識〕

① 能の分類	7
② 能の楽器 略式の演能	13
③ 略式の演能（続き） 舞事と働事	16
④ 舞事と働事（続き）	18

このリーフレットは、第66回名古屋春栄会の演目を解説したものです。

演目の記載順は、番組の順です。

詞章については、金春流の謡本から転載しました。

## 高砂（たかさご）

---

【分類】初番目物（脇能＝男神物） ＊神舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

肥後国（熊本県）、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州（兵庫県）高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷（熊手）と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をする、それは奇なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

げにさまざまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつるなる。青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。さて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。壽福をいただき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声を楽しむ。さっさっの声を楽しむ。

## 七騎落（しちきおち）

---

【分類】四・二番目物（侍物） \*男舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：土肥実平（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

治承4（1180）年8月、石橋山の合戦に敗れた源頼朝は、他日を期して安房上総の方へ落ちのびようとしています。そして、一行の軍師格の土肥実平に、船の用意を命じます。ところが、いざ漕ぎ出そうとして船中を見ると、主従の人数が八人でした。頼朝は、祖父為義が九州へ落ちた時も八騎であり、父義朝が近江へ敗走した時も八騎であったことを思い出し、不吉の数だから、一人を降ろすように命じます。実平は、いずれも忠義の者ばかりで選びかねた末、最長老の岡崎義実を降ろそうとしますが、彼は承知しません。やむなく我が子遠平を下船させ、一行は親子の別れに同情しつつも、船を沖に進めます。遠ざかる陸を見ると、敵の数は多く、遠平は討死するに違いないと、実平は心ひそかに悲しみます。翌日、沖合で和田義盛が頼朝の船を捜し出し、声をかけてきます。実平は義盛の心を試すため、主君はいないと偽ります。すると、義盛はそれでは生きているかいないと、腹を切ろうとするので、これを止め、近くの浜辺に船を寄せて頼朝に対面させます。そこで、義盛は実平に向い、遠平は自分が助けて来たと言い、父子を引き合わせます。実平は夢かとはばかり喜び、父子は抱き合います。そして一同は酒宴を催し、実平はすすめられて喜びの舞を舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

かくて時日をめぐらさず。かくて時日をめぐらさず。西国のつわもの馳せ参ずれば。ほどなくおん勢二十万騎になり給いつつ。たなごころにて治め給えるこの君の御代の。めでたきためしも実平正しき忠勤の道にいる。実平正しき。忠勤の道にいる。弓矢の名をこそあげにけれ。

## 熊野 (ゆや)

---

【分類】三番目物（現在鬘物） \*中ノ舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：熊野（面・小面）

【あらすじ】（今回の仕舞[キリ]の部分…下線部）

平宗盛は遠江国（静岡県）池田の長の熊野を愛妾として都に留めています。その熊野が故郷に残している老母が病氣となり、熊野の帰国を促す手紙を侍女の朝顔がたずさえて都に上って来ます。心弱くなっている母の様子に熊野は宗盛のもとに行き、その手紙を見せて暇を乞うことにします。熊野は宗盛の邸に行き、母の手紙を読み上げて、今一度母に会いたいと帰国を願いますが許されません。宗盛はかえって熊野の心を引き立てようと花見の供を命じ、牛車に乗って一緒に清水寺に向かいます。都大路の春景色にひきかえ、車中の熊野はひたすら母を案じており、清水に着いて車を降りると、まず観世音に母の命を折ります。やがて花の下で酒宴が始まり、熊野は宗盛の勧めで、心ならずも興を添えるためにあたりの風物を眺めながら舞を舞い、花の美しさをたたえます。ところが舞の途中でにわかには村雨が降り出し、花を散らします。熊野は舞をやめ、「いかにせん都の春も惜しけれど、馴れし東の花や散るらん」と歌を詠み、それを短冊にしたためて宗盛に差し出します。その歌を見た宗盛は、熊野の心を哀れに思い、東国に帰ることを許します。熊野は喜び、これも観世音のおかげと感謝し、宗盛の気持ちの変わらぬうちにと、その場から故郷に旅立ちます。

【詞章】（今回の仕舞[キリ]の部分の抜粋）

あらありがたや嬉しやな。これ観音のご利生なり。これまでなりや、嬉しやな。これまでなりや嬉しやな。かくて都にお供せば。またもや御意の変わるべきただ。このままにお暇と。いうつけの鳥が鳴く。東路さしてゆく道の。東路さして行く道の。やがて休ろう逢坂の。関の戸ざしも心して。明け行く跡の山見えて。花を見捨つるかりがねの。それは越路われはまた。あずまに帰る名残かな。あずまに帰る名残かな。

## 経政（つねまさ）

---

【分類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作者】不詳

【主人公】シテ：平経政の霊（面・童子）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

京都の仁和寺、御室御所〔おむろごしよ〕の守覚〔しゅがく〕法親王は、琵琶の名手である平経政を少年の頃から寵愛されていました。ところが、このたびの一ノ谷での源平の合戦において、経政が討ち死にしたので、生前、彼にお預けになったこともあった「青山〔せいざん〕」という銘のある琵琶の名器を仏前に供え、管絃講〔かげんこう〕を催して回向するように行慶〔ぎょうけい〕僧都に仰せつけになります。行慶は、管絃を奏する人々を集めて法事を行います。すると、その夜更けになって、経政の亡霊が幻のように現れ、御弔いのありがたさに、ここまで参ったのであると僧都に声をかけます。そして、手向けられた琵琶を懐かしく弾き、夜遊の舞を舞って興じます。しかし、それもつかの間、やがて修羅道の苦しみに襲われ、憤怒の思いに戦う自分の姿を恥じ、灯火を吹き消して闇の中に消え失せます。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

あら恥かしや嗔恚の有様。はや人々に見えけるか。あの灯火を消し給えとよ。灯火を背けては。灯火を背けては。ともに憐れむ深夜の月をも。手に取るや帝釈修羅の。戦いは火を散して。嗔恚の矢先は雨となって。身にかかれば払う剣は。他を悩し我と身を切る。紅波はかえって猛火となれば。身を焼く苦患恥かしや。人には見えじものを。あの灯火を消さんとして。その身は愚人。夏の虫の。火を消さんと飛び入りて。嵐とともに灯火を。嵐とともに。灯火を吹き消して。くらまぎれより。魄霊は失せにけり。魄霊の形は失せにけり。

## 松風（まつかぜ）

---

【分類】三番目物（本鬘物） \*中ノ舞、破ノ舞

【作者】観阿弥原作、世阿弥改作

【主人公】シテ：汐汲女＝松風の霊（面・小面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

ある秋の夕暮れ、都から旅に出た僧が、西国へ下る途中、須磨の浦に着き、由緒がありそうな一本の松を見つけます。土地の者に尋ねると、在原行平が愛した松風、村雨という二人の海女のゆかりの松であると教えられます。僧は、その松をねんごろに吊った後、近くの塩焼き小屋で一夜を明かそうと思います。やがて、二人の海女が、月明かりに汐を汲み、海女の身を嘆きつつ、車を引いて帰って来ます。僧は、彼女らに一夜の宿を乞います。姉妹は、見苦しい宅び住いを恥じて断りますが、重ねての申し出に、僧を請じ入れます。そして、僧が磯辺の松を吊った話をすると、二人はなぜか涙にくれます。僧が不審に思っ、その仔細を尋ねると、自分たちは、実は、昔この浦に3年の間、流されていた行平中納言に寵愛を受けた松風、村雨の幽霊であると名乗り、行平との間の懐かしい思い出や、行平が都に帰ってまもなく世を去ったことなどを物語ります。そして、松風は行平の形見の烏帽子狩衣を手にしながら追憶の涙に沈みます。やがて、その装束を身につけた松風は、物狂いの状態になり、狂おしく舞い、松が行平であるかのように寄り添います。しばらくして、落ち着いた松風は、村雨と共に妄執の苦しみを述べ、あらためて回向を乞うように僧に頼みます。そこで、僧が目を覚ますと、既に夜が明けていて、松風の音が残っているだけでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

いなばの山の峰に生うる。松とし聞かば。今帰り来ん。それはいなばの。遠山松。これは懐かし君ここに。須磨の浦わの松の行平。立ち帰りこば。我も木蔭に。いざ立ち寄りて。そなれ松の。なつかしや。松に吹き来る風も狂じて。須磨の高波。はげしき夜すがら。妄執の夢にみみゆるなり。我が跡吊いてたび給え。暇申して。帰る波の音の。須磨の浦かけて吹くやうしろの山おろし。関路の鳥も声々に。夢も跡なく夜も明けて村雨と聞きしを今朝見れば。松風ばかりや。残るらん。

## 海人（あま）

---

【分類】初・五番目物（略脇能物＝女菩薩物） ＊早舞

【作者】不詳

【主人公】前シテ：海人（面・曲見）、後シテ：龍女（面・泥眼）

【あらすじ】（『玉ノ段』の部分…下線部）

房前大臣（藤原房前）は讃岐国（香川県）の志度の浦で亡くなったという母の追善のため、従者と供人を伴って、はるばる志度の浦までやって来ます。すると、一人の海人が現れます。従者が、海人に水底に映る月を見たいので、海松布〔みるめ〕を刈るように命ずると、海人は昔も、宝の珠を海底から取り上げるためにもぐったことがあると言い、昔、唐土から興福寺に三種の宝が贈られたが、そのうち面向不背の珠だけが、この浦の沖で龍宮に取られてしまった。藤原淡海公（藤原不比等）はそのことを深く惜しまれ、身をやつしてこの浦に下り、海人乙女と契りを交わし、その玉を取り返してくれるように頼んだこと、海人が淡海公の子をもうけ、その子が今の房前大臣であることを語ります。これを聞いた房前大臣が、それは自分のことだと名乗ると、海人は、我が子を淡海公の後継ぎにする約束と交換に、千尋の綱を腰に結わえ、海に潜り、見事に珠を取り返すものの、龍神の激しい抵抗にあい、自分の乳の下を掻き切って、そこに珠を隠し、流れ出る血潮に龍神がたじろぐうちに、息も絶え絶えになりながら海人は帰ってきたものの、息を引き取りましたと語り、自分こそ、その海人の亡霊であると明かし、海中に姿を消します。

<中入>

房前大臣は、浦の者からも珠取りの次第を聞き、亡き母の残した手紙を読み、十三回忌の追善供養を営みます。読経のうちに、亡霊は龍女の姿で現れ、法華経の功德で成仏できたと喜び、舞を力強く、美しく舞います。

【詞章】（『玉ノ段』の部分の抜粋）

その時人人力を添え。引きあげ給えと約束し。一つの利剣を。抜きもって。かの海底にとび入れば。空はひとつに雲の波。煙の波をしのぎつつ。海漫々とわけ入りて。直下とみれども底もなく。ほとりも知らぬ海底に。そも神変はいさ知らず。とり得ん事は不定なり。かくて龍宮にいたりて。宮中をみればその高さ。三十丈の玉塔に。かの玉をこめおき。香華を供え守護神に。八龍なみいたり。その外悪魚鰐の口。のがれがたしやわが命。さすが恩愛の。ふる里の方ぞ恋しき。あの波のあなたにぞ。我が子はあるらん。父大臣もおわすらん。さるにてもこのままに。別れはてなん悲しきよと。涙ぐみて立ちしが。又思い切りて。手を合わせ。なむや志渡寺の観音薩埵の。力を合わせてたび給えとて。大悲の利剣を額にあて。龍宮の中にとび入れば。左右へばっとぞのいたりける。そのひまに宝珠を盗みとって。逃げんとすれば。守



護神追かく、かねてたくみし事なれば。持ちたる剣をとり直し。乳の下をかききり玉をおしこめ、剣を捨ててぞふしたりける。龍宮のならいに死人をいめば。辺りに近づく悪龍なし。約束の縄を動かせば。人々喜び引きあげたりけり。玉は知らずあまびとは海上にうかみ、いでたり。

## 能のミニ知識①

### ★能の分類

**五番立て**…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

#### ○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

#### ○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといわれます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

#### ○三番目物(鬘[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

#### ○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

#### ○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

<13 ページへ続く>

## 花筐（はながたみ）

---

【分類】四番目物（狂女物） ＊カケリ、イロエ

【主人公】前シテ：照日の前（面・増女）、後シテ：照日の前（面・増女）

【作者】世阿弥

【あらすじ】（今回の仕舞[クセ]の部分…下線部）

越前国（福井県）味真野にいた大迹部皇子は、皇位を継承することになり、急遽、都に上ります。皇子は寵愛していた照日ノ前のもとに使者を送り、別れの文と花筐を届けます。その文を読んだ照日ノ前は形見の花筐を抱いて悲しく我が家へ戻って行きます。

<中入>

その後、皇子は継体天皇となられ、大和国（奈良県）玉穗に都を移して、政を行っていましたが、ある日、紅葉狩に出かけられます。一方、照日ノ前は恋慕のあまり心が乱れ、侍女を伴ってはるばる都へとやって来ます。そして、たまたま御幸の行列に行き会いますが、朝臣に見苦しい狂女として払いのけられ、そのはずみで花筐を打ち落とされます。照日ノ前は、それは帝の花筐であると言って咎めます。朝臣にその理由を尋ねられ、皇子とのかなわぬ恋の悲しみを嘆き、李夫人の故事を物語り、自分の思慕の情を訴えます。天皇がその花筐を取り寄せてご覧になると、確かに見覚えのある品なので、照日ノ前に狂気を収め、もとどおり側に仕えよとの御言葉に、喜んで一緒に皇居へと向かいます。

【詞章】（今回の仕舞[クセ]の部分の抜粋）

帝ふかく嘆かせたまいつつ。そのおん形を。甘泉殿の壁に写し。われも画図に立ち添いて。明け暮れ嘆きたまいしに。されどもなかなか。おん思いは増されども。もの言い交わす事なきを。深く嘆きたまえば。李少と申す太子の。幼なくまします。父帝に奏したもうよう。李夫人は元はこれ。上界の嬖妾。歌吹国の仙女なり。一旦人間に。生るとは申せどもついに元の。仙宮に帰りぬ。泰山府君に申さく。李夫人の面影を。しばらくここに招くべしとて。九華帳の内にして。反魂香を。焚きたもう。夜更け人静まり。風すさまじく。月秋なるに。それかと思う面影の。あるかなきかにかげろえば。なおいや増しの思い草。葉末に結ぶ白露の。手にも溜まらで程もなく。ただ徒らに消えぬれば。縹緲悠揚としてはまた尋ねべき方なし。悲っさのあまりに。李夫人の住み慣れし。甘泉殿を立ち去らず。空しき床をうち払い。古き衾古き枕。ひとり袂を片敷き。

## 西行桜（さいぎょうざくら）

---

【分類】 三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作者】 世阿弥

【主人公】 シテ：老桜の精（面・石王尉）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

京都西山にある西行の庵室には、老木の桜が今は盛りと咲いています。西行は、一人心静かに花を楽しもうと、今年は花見禁制にする由を能力〔のうりき〕に伝え、その事を触れさせます。そこへ、ここかしこと花の名所を訪ねて、春の日を送っている下京辺の人々が、西行の庵の桜が盛りと聞いて、やって来ます。西行は煩わしくは思いますが、花を愛する気持ちを汲んで断りかね、柴垣の戸を開けて一行を請じ入れます。しかし浮世を離れて花を眺めたいと思っている西行にとっては、俗の花見客が大勢やって来るのは、やはり迷惑です。そして思わず、「花見んと 群れつつ人の 来るのみぞ あたら桜の 咎にはありける」と口ずさみますが、花見の人達と共に花を愛で仮寝をします。

その夜、西行の夢の中に、老木から白髪のお翁が現れて、西行の先刻の歌の心を問いただし、桜は非情無心の草木であるから、浮世の咎はないのだと言います。そして自分は桜の精だと名乗り、歌仙西行に逢えたことを喜び、名所の桜を讃えて舞を舞い、春の夜を楽しみますが、やがて夜が明けると、老桜の精は別れを告げて消え失せ、西行の夢も覚めます。あたりは一面に敷き詰めたように落花が散り、人影もありません。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

見渡せば。柳桜をこきまぜて。都は春の錦。さんらんたり。千本の桜を植え置きその色。所の名に見する。千本の花ざかり。雲路や雪に残るらん。毘沙門堂の花ざかり。四王天の栄花も。これにはいかで勝るべき。上なる黒谷下川原。むかし遍昭僧正の。浮世をいとし華頂山。鶯のみ山の花の色。枯れにし鶴の林まで。思い知られてあわれなり。清水寺の地主の花。松吹く風の音羽山。ここはまた嵐山。戸無瀬に落つる。滝つ波までも。花は大井川。井堰に雪や。かかるらん。

## 籠太鼓（ろうだいこ）

---

【分類】四番目物（狂女物） ＊カケリ

【作者】不詳

【主人公】シテ：関清次の妻（面・曲見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

九州松浦の何某は家人の関清次という者が、他郷の者と口論の末、相手を殺害したので、捨てておけず、捕らえて牢に閉じ込め、下人に番を命じます。ところが、ある夜、清次は牢を破って逃げてしまいます。領主は清次の妻を呼び出し、夫の居所を尋ねます。女は知らないと言い張るので、判明するまで身代わりに入牢させます。領主は再び逃さないため、牢に太鼓を掛け、一刻ずつそれを打って番をするように下人に申し渡します。ところが女がにわかに狂気を起こしたようなので、牢から出してやろうとすると、この牢こそ愛する夫の形見だから出ないと言います。そのやさしい心を感じた領主は、夫婦ともに許すことにします。牢から出て来た女はそこに掛けてある太鼓を見つけ、古歌を引いて夫の身を案じ、中国の鼓の故事を歌いながらその鼓を打ちます。すると却って狂乱の態が増し、夫を慕うあまり、なつかしいこの牢を離れないと、再び牢の中に入ってしまう。領主は、あまりの痛々しさに深く心を打たれ、亡父十三年の追善にと夫婦の赦免を強く約し、神明に誓います。すると女は冷静になり、初めて夫の居所を明かし、自ら夫の許を訪ねて連れ戻して、仲睦まじく暮らします。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

鼓の声も時過ぎて。鼓の声も時過ぎて、日も西山にかたむけば。夜の空も近づく。六つの鼓打とうよ。五つの鼓はいつわりの。ちぎりあだなるつまごとの。ひき離れいづくにか。わがごとく忍び寝の。やわらやわら打とうよや。やわらやわら打とうよ。四つの鼓は世の中に。四つの鼓は世の中に。恋ということも。うらみということも。なき習いならば。ひとり物は思わじ。九つの。九つの。夜半にもなりたや。あら恋しわがつまの。面影に立ちたり。嬉しやせめてげに。身代わりに立ちてこそは。二世のかいもあるべけれ。この籠出ずることあらじ。懐かしのこの籠や。あら懐かしのこの籠。

## 吉野静（よしのしずか）

---

【分類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【主人公】シテ：静御前（面・増または小面）

【作者】世阿弥

【あらすじ】（今回の仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

源義経が吉野の衆徒の裏切りによって吉野山を落ちたとき、防ぎ矢を仰せつかった佐藤忠信は都道者を装って大講堂での衆徒の詮議の模様を窺います。そして、衆徒の詮議の中に入って、頼朝と義経が和解したという噂や義経の武勇を語って義経追撃の矛先を鈍らせます。やがて静御前も出てきて、忠信との打ち合わせどおり、舞の装束で、法楽の舞を舞います。静は忠信と呼吸を合わせて義経の忠心を説き、頼朝との和解を匂わせます。衆徒は静の舞の面白さに時を移し、また義経の従者達の武勇に恐れをなし、ついに一人として義経の追討に赴く者はいませんでした。

【詞章】（今回の仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

そもそも景時が。その讒言の水上を。思えば渡辺や。流るる水にみち汐の。逆簪立てんと浮舟の。梶原が申し事。よも順義には候わじ。されば義経は。すぐに治めし三吉野の。神の誓の誠あらば。頼朝も聞しめし。直され義経。咫尺の勅を受け。洛陽の西南は。これ分国となるべし、さあらば当山の。衆徒ことごとく散洛し。帰依渴仰の御袖に。恵みをいただき給うべしあなかしこ不忠なし給うな。御料は候わじ。ただし衆徒中に。なお憤り深うして。すすみて追っかけ給うとも。その名きこゆる人々を。討ちとどめ申さんは。片岡益尾鷲の尾さて。忠信は双びなき。精兵ぞよ人々に。防矢射られ給うなど。語ればげには衆徒中に。進む人こそなかりけれ。

## 善知鳥（うとう）

---

【分類】四番目物（執心物） ＊カケリ

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・尉面）、後シテ：獵師の亡霊（面・瘦男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

諸国一見の僧が、陸奥国（青森県）外の浜への行脚を志し、途中、越中国（富山県）立山に立ち寄り、目のあたりに地獄の光景を見て感慨を催し下山します。すると一人の老人が呼びかけて、外の浜へ下ったら、去年の秋に死んだ獵師の宿があるから、その妻子を訪ね、そこにある蓑笠を手向けてくれるように頼み、その証拠にと、自分の着ていた麻衣の片袖を引きちぎって渡します。

<中入>

片袖を持って旅僧は奥州へ下り、外の浜に着くと、土地の者に獵師の家を尋ねます。教えられた家へ赴き、獵師の妻と子供に、立山で会った老人の片袖を渡し、伝言を伝えます。妻は衣を取り出し、それに合せると、まさしく亡き人の形見とぴったり合います。そこで妻子はおどろき懐しみつつ、蓑笠を手向け、僧と共に回向します。すると、獵師の亡霊が現れ、生前多くの鳥獣を殺した重い罪科を仏の力で消滅させてくれるように頼みます。妻子は獵師の姿を見て泣くばかりです。獵師が我が子に近寄り髪を撫でようとすると、雲霧に妨げられて子供の姿が見えなくなります。獵師は生前の殺生を悔い、善知鳥を捕える時の様子を物語り、その報いで今は地獄に落ちて苛責を受けていると様を見せ、この苦しみを助けてほしいと言ったかと思うと、消え失せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

親は空にて血の涙を。親は空にて血の涙を。降らせば濡れじと管箆や。笠を傾けこ  
こかしこの。便りを求めて隠れ笠。隠れ箆にもあらざれば。なお降り掛かる血の涙  
の。目も紅に染み渡るは。紅葉の橋の。かささぎか。娑婆にては。善知鳥やすかた  
と見えしも。冥途にしては化鳥となり。罪人を追っ立て鉄の。嘴を鳴らし羽を叩き。  
銅の爪を。研ぎ立てては。眼を掴んでしむらを。叫ばんとすれども猛火の煙に。  
むせんで声を。上げ得ぬは。鴛鴦を殺しし咎やらん。逃げんとすれど。立ち得ぬは。  
羽抜け鳥の報いか。善知鳥はかえって鷹となり。我は雉とぞなりたりける。のがれ  
交野の狩り場の吹雪に。空も恐ろし地を走る。犬鷹に責められて。あら心うとうや  
すかたやすき隙なき身のくるしみを。助けて賜べや御僧。助けて賜べや御僧と。い  
うかと思えば。失せにけり。

## 海人（あま）

---

『玉ノ段』

6・7ページ参照。

## 能のミニ知識②

### ★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓:台に据えて、二本のバチで打ちます。

### ★略式の演能

#### 素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるものです。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡います。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態です。

#### 独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するものです。演者は紋付袴姿です。

#### 連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するものです。演者は紋付袴姿です。

#### 仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞うものです(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞います。仕舞扇をしますが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いませぬ。シテ一人で演じるのが普通ですが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもあります。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされています。

<16ページに続く>

## 鉄輪（かなわ）

---

【分類】 四・五番目物（怨霊物）

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：都の女（面・泥眼）、後シテ：鬼女（面・生成）

【あらすじ】（連吟の部分…下線部）

都に住む一人の女が、自分を捨てて新しく妻を迎えた夫の不実を恨んで、洛北・貴船の社に日参し、祈願をかけています。今日も社前に進むと、待ち構えていた社人が、「頭に鉄輪をいただき、その三本の足に火を灯し、顔に丹を塗り、赤い着物を着て、怒る心を持てば、たちまち鬼になって願いがかなう」という神託のあったことを告げます。女は人違いだと言いますが、そう言う間にも顔色が変わり、つれない人に思い知らそうと走り去ります。

<中入>

一方、下京の男は、悪い夢見が続くので、陰陽師の清明のもとを訪れ、事情を述べて占ってもらおうと、女の恨みで今夜にも命が尽きると言われ、急いで祈禱を頼みます。清明は、祭壇を調べ、男と新しい妻の人形を作って置き、祈り始めます。すると、悪鬼となった女の霊が現れ、夫の心変わりを責め、後妻の髪をつかんで激しく打ちすえますが、守護する神々に追っ立てられ、神通力を失って、心を残しながらも退散します。

【詞章】（連吟の部分の抜粋）

悪しかれと思わぬ山の。峰にだに。思わぬ山の峰にだに。人の嘆きは生うなるに。いわんや年月。思いに沈む怨みの数。つもって執心の。鬼となるもことわりや。いでいで命を取らん。いでいで命を取らんと。しもつを振り上げうわなりの。髪を手にから巻いて。打つや宇都の山の。夢うつつとも分かざる浮き世に。因果はめぐりあいたり。今さらさこそ。悔しかるらめ。きて懲りよ思い知れ。ことさら怨めしき。ことさら怨めしき。あだし男を取って行かんと。臥したる枕に立ち寄り見れば。恐ろしやみてぐらに。三十番神ましまして。魍魎鬼神はけがらわしや。出でよ出でよと責めたもうぞや。腹立ちや思う夫をば。取らであまさえ神々の。責めを蒙る悪鬼の神通力自在の勢い絶えて。力もたよたよと。足弱車のめぐり逢うべき。時節を待つべしや。まずこの度は帰るべしと。いう声ばかりはさだかに聞こえ。いう声ばかり。聞こえて姿は。目に見えぬ鬼とぞ。なりにける。



## 鶴（ぬえ）

---

【分類】四・五番目物（尾能）

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：舟人（面・怪土）、後シテ：鶴の霊（面・小飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

諸国を行脚する旅の僧が、三熊野へ参詣した後、都に上る途中、摂津国（兵庫県）芦屋の里に着きます。土地の者に宿を乞いますが、旅人に宿を貸すことが禁制になっているとのことで、洲崎の御堂で一夜を明かすことにします。夜更け頃、そこへ異様な風体をした者が、丸木舟に乗って漕ぎ寄せて来ます。不審に思っ言葉かけると、自分は近衛院の御代に、頼政の矢先にかかって命を失った鶴の亡魂であると名乗り、その射止められたときの模様を詳しく語ります。僧は回向をし、成仏をすすめますが、舟人はまた丸木舟に乗って夜の波間に消えて行きます。

<中入>

土地の者が見舞いに来たので、旅僧は頼政の鶴退治の物語を所望します。語り終えた土地の者は、鶴の亡霊への供養をすすめて帰って行きます。僧が海辺で読経していると、鶴の亡霊が現れ、供養を感謝します。そして、夜毎に帝を悩ましたため、頼政に退治されたことを語り、これも天罰であったと懺悔し、頼政はその功で、主上より御剣を賜ったこと、その時、宇治の大臣と歌のやりとりがあり、それでも名を上げたことを物語ります。そして、自分はうつぼ舟に入れられて淀川に流され、この芦屋の浮き洲にとどまって成仏できないでいたのだと言い、僧の回向を頼んで、海中へと消えて行きます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

東三条の林頭に。しばらく飛行し。丑みつばかりの夜な夜なに。ご殿の上に。飛び蔽えば。すなわちご悩。しきりにて。すなわちご悩しきりにて。玉体をなやまして。怯えたまぎらせ給うことも。わがなす業よと怒りをなししに。思いもよらざりし頼政が。矢先に当れば変身うせて。らくらくらいらいと地に倒れて。たちまちに滅せしこと。思えば頼政が。矢先よりは君の天罰をあたりけるよと。今こそ思ひ知られたれ。そののち主上御感あって。獅子王という御剣を。頼政にくだされけるを宇治の。大臣賜わりて。階を下りたもうに。おりふし郭公音ずれば。大臣とりあえず。ほととぎす。名をも雲居に。あぐるかなと。仰せられければ。頼政。右の膝をついて。左の袖をひろげ。月をすこし目にかけて。弓張月の。いるに任せてと。つかまつり御剣をたまわり。ご前をまかり帰れば。頼政は名をあげてわれは。名を流すうつお舟に。おし入れられて淀川の。淀みつ流れつゆく末の。鶴殿も同じ芦屋の。浦わの浮きすに。流れかかって。朽ちながらうつお舟の。月日も見えず暗きよ

り。冥き道にぞ入りにける。はるかに照らせ山の端の。はるかに照らせ山の端の月と共に。海月も入りにけり。海月とともに。入りにけり。

## 能のミニ知識③

### ★略式の演能（続き）

#### 舞囃子〔まいばやし〕

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うものです。平均して10~20分程度の長さになります。長刀や杖などの手道具は用いますが、作り物(大道具)は省略します。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となりましたが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされています。

#### 袴能〔はかまのう〕

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるものです。

#### 半能〔はんのう〕

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるものです。

#### 独調〔どくちょう〕、独鼓〔どっこ〕、一調〔いっちょう〕

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもののことをいいます。

#### 一管〔いっかん〕

笛の「聞かせどころ」を独奏するものです。

#### 一調一管〔いっちょういっかん〕

打楽器のうち一種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合があります。

#### 素囃子〔すばやし〕

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるものです。

#### 番囃子〔ばんばやし〕

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるものです。

### ★舞事と働事

舞事〔まいごと〕…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞。

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

<18 ページへ続く>

## 鶴亀（つるかめ）

---

【分類】初番目物（協能＝唐物） \*楽

【作者】不詳

【主人公】シテ：皇帝（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国では年の始めに、華麗な宮殿で、四季の節会の最初の儀式が行われました。まず、官人が出て、御代を讃え、皇帝が月宮殿に行幸なる由を触れます。皇帝は大臣たちを従えて登場し、宮殿に着座して、群臣から拝賀を受けます。ついで大臣は毎年の嘉例により、鶴亀を舞わせることを奏聞します。池の水ぎわに遊ぶ鶴と亀は、皇帝の長寿を讃えてめでたく舞い納めると、皇帝も喜び、国土の繁栄を祝って、自ら舞を舞い、やがて長生殿へと帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

月宮殿の白衣の袂。月宮殿の白衣の袂の。いろいろ妙なる。花の袖。秋は時雨の紅葉の葉袖。冬は冴えゆく雪の袂を。ひるがえす衣も薄紫の。雲の上人の舞楽のかずかず。げいしょう羽衣の曲をなせば。山河草木国土豊に千代万代と。祝い奉り。官人駕輿丁御輿を早め。君の齡も長生殿に。君の齡も長生殿に。還御なるこそ。めでたけれ。

## 能のミニ知識④

### ★舞事と働事（続き）

○男舞:直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○神舞:若い男体の神がテンポも速く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞:テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞:序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽[かぐら]:「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。  
雅な感じの舞です

○楽[がく]:舞楽のような感じの舞です。  
中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]:羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。  
「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ:囃子に合わせて舞台を一巡する舞踏的な所作のことです。

○カケリ:「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。  
精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り:鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。  
「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]:龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。  
働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>